

【徒書日課】フィリピの信徒への手紙 1章12～30節

¹²兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。¹³つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、¹⁴主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

¹⁵キリストを宣傳伝えるのに、わたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もあります。¹⁶一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、¹⁷他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせています。¹⁸だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます。これからも喜びます。¹⁹というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。²⁰そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。²¹わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。²²けれども、肉において生き続ければ、寒り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。²³この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。²⁴だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。²⁵こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。²⁶そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになりました。

²⁷ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行つてあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、²⁸どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。²⁹つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。³⁰あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 11章28～44節

²⁸マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。²⁹マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。³⁰イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におら

れた。³¹家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。³²マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。³³イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、³⁴言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。³⁵イエスは涙を流された。³⁶ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。³⁷しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。³⁸イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。³⁹イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。⁴⁰イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。⁴¹人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。⁴²わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」⁴³こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。⁴⁴すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

「石を取りのけなさい」【こども説教のために】

教会は、「世界聖餐日」に、世界中の教会が「聖餐」を通して一つに結ばれていることを思い起こします。「聖餐」は、主イエスの言葉と共にパンと杯を分け合う「主の食卓」を囲むことです。主イエスは、その食卓に誰でも分け隔てなくお招きくださったのです。国や言葉の違う者も、豊かな者も貧しい者も、齢を重ねた者も若い者も、そして生きている者も死んだ者も、神が一つの食卓にお招きくださっていると、主イエスはお教えくださったのです。そう信じ、主の食卓への招きを受ける者は、洗礼を受け、共に「聖餐」のパンと杯にあずかるのです。

友であったラザロが死んだとき、主イエスは、離れたところにいました。駆けつけたときには、すでに墓に葬られていました。墓の入口は、大きな石で閉ざされていました。死んだラザロは別の世界に行ってしまったと、皆が思っていました。けれども、主イエスは、「その石を取りのけなさい」と言われました。墓の入口を開き、死んだラザロを呼び出され、姉妹らや村の人々のもとにお返しになられたのです。死んだラザロを、生きている者たちと共にいるようにしてくださったのです。

死んだ者も、生きている者も、共に神の御前に立つ。主イエスを信じる者は、「終わりの日」を待たずとも、今すでにそのようにされているのです。

「出て来なさい」

「世界聖餐日」は、1930年代に北米の教会で呼びかけられるようになり、日本の諸教会でも第二次世界大戦後、広く記念されてきました。20世紀はじめの世界戦争の時代に、どこよりもキリスト者の教会がまず、「聖餐」で示されるような一致、相互の違いを超えた平和を実践する者であるべきだという自覚から、この記念日は今日まで続けられてきました。現実には、今なお深刻な分断と対立の中に、世界も教会もとどまり続けています。キリスト者の教会は、世界のことはおろか自らのことにおいてさえ、一致と平和を実現するには無力すぎることを思い知らされてきたのです。それでも、教会は、「世界聖餐日」を今日まで記念し続けてきました。今年も、多くの教会がこれを記念する礼拝で聖餐にあずかろうとしていることでしょう。それは、教会が、実のところ無力な者であることを自覚しているからです。

わたしたちは、無力であることを売り物にしているわけではありません。為すべきことを果たす実力を身に着けたいと思わない者が、いるでしょうか。もちろん、人の力に頼り、依存しなければならぬときもあります。それでも、自分だけは何かかも「ただ乗り」していてよい、とは思わないでしょう。わたしたちが、自分自身のことはもちろん、誰かのために働きたいと願うのは、偽善でも何でもなく、人として当たり前のことなのです。

それでも、教会は、わたしたちが無力な者であることを自覚するところから始まる営みなのだと、繰り返し説いてきました。わたしたちは常に、何かに縛られ、与えられたものによって今を生かされているのです。そうであればこそ、真に良いお方に縛られ、そのお方からお与えいただいたものによって生き、為すべきことを為す者でありたいのです。教会は、そのお方は他でもない主イエス・キリストであると信じ、従って来た者の営みなのです。

子どもたちと「平和の挨拶」を交わしました。聖壇に立って皆さんが互いに挨拶を交し合う姿を見させていただくのは、牧師の特権です。年に数回、数えるほどの機会にしか「平和の挨拶」をしていませんが、多くの方がすでに慣れた様子で挨拶を交わしてくださっています。それでも、中には、そのときに一人どうしてよいか分からずに立ちすくんでいる方があり、心配になります。聖壇から降りて行って挨拶しようかという衝動に駆られることもあります。その人は、わたしたちの間近にいながら、いまだ互いを隔てる大きな石に阻まれて、顔を向き合わせるができずにいるのです。

「出て来なさい」と、ラザロを墓の中から呼び出された主イエスは、そうお告げになる前に、人々に、「**その石を取りのけなさい**」とおっしゃられました。「石」を取りのけて、その人が出てくることができるようにするのは、わたしたちなのです。

「ほどいてやって、行かせなさい」

大規模修繕工事の残されていた作業がすべて終わり、化粧直しされた会堂をご覧いただけるようになりました。屋根の天辺に建てられた十字架塔から、外壁や軒、扉や雨樋まで、見違えるようになりました。その分、手を付けていない掲示板や内装が、少し気になるかもしれません。

工事の足場が組まれていたとき、安全のための覆いも掛けられていました。完全に覆い隠してしまうようなものではありませんでしたが、覆いが掛けられていなかった屋根の上の十字架塔がなければ、道行く人は、ここが教会であることに気づかなかったかもしれません。

工事の初めに足場が組まれ、覆いが掛けられたとき、ある方が、「これもいいわね」とおっしゃいました。それを聞いた周りの方は皆、不思議そうな反応をしていました。わたしも、その方が何を良いと思われたのかと不思議に思って、心に留めてきました。その方は、覆いが掛けられ、隠されていることを、よいと思われたのでしょうか。足場や覆いそのものを、何か良いものと思われたのでしょうか。

コロナ禍の数年を経て、今でも、人の集まるところに出向くときにはマスクをする習慣を守っていらっしゃる方は少なくないでしょう。子どもたちは、学校の指導なのでしょうが、教会に来たときも、玄関で慌ててマスクをするようなことがあります。若い人たちの間では、マスクを外してお互いの素顔を見せ合うことに抵抗を感じるようになってきている者も少なくないそうです。コロナ禍前から、若者の一部には、日常的にマスクをするという方たちがいました。素顔を見せたくないのです。自分の顔を見せること、表情を読み取られることを、嫌うのです。そのような人たちにとって、コロナ禍でだれもがマスクをする世の中になったことは、救いでもあったと言います。

「石」が取りのけられ、墓の中から呼び出されたラザロは、手足を布でぐるぐる巻きにされ、顔も覆いで包まれた姿で現れました。若者たちがハロウィンで仮装する「ゾンビ」の姿です。「ゾンビ」に限らず、仮装は、普段の自分を覆い隠すものです。自分を覆い隠すことで、何かの役になりきって、彼らは楽しめます。仮装の中に素の自分を覆い隠しながら。

その覆いを、その手足を縛るものを、「ほどいてやって、行かせなさい」と、主イエスは言われるのです。手足を縛られ、素顔を覆い隠された者は、墓の中の人、死んだ者なのです。そこから呼び出されるのは、手足を縛るものから解放され、覆い隠さないではいられなかった素顔を顕わにすることができるようになるためです。そうしたときに、その人は、取り戻されるのです、家族のもとに、彼の生きる社会、共同体の中に。

これは、すべての人に恵みとして与えられるものなのです。